



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	交錯する「ホーム」と「アウェイ」：コロナと観光からみる「ホーム」概念のゆらぎ
Author(s)	鍋倉, 咲希
Citation	Sauvage : 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 17, 34-44
Issue Date	2021-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83063
Type	other
File Information	Sauvage17_2_4r.pdf



交錯する「ホーム」と「アウェイ」 —コロナと観光からみる「ホーム」概念のゆらぎ—

鍋倉 咲希

立教大学大学院観光学研究科 博士後期課程
nabekuras5@gmail.com

1. 「ホーム」はどこか

COVID-19 の流行をめぐり、「ステイホーム」という標語が流布しているのは周知のとおりである。日本ではじめて緊急事態宣言が発令された 2020 年 4 月以降、政府や各都道府県による様々な発表をはじめ、各メディアにおいて、主に外出自粛や家への滞在を強調する意味で上記の標語を見かけるようになった。まるでコロナに立ち向かう国民の合言葉のように、声高に「ホーム」への滞留が叫ばれてきた。

2021 年初めに「第 3 波」と呼ばれる感染爆発が生じているいま、「ステイホーム」は再度重要な標語となっている。昨年の春に比べ、それほど強い語勢を感じない気がするのには、2 度目の緊急事態宣言がもつ制限の限定性だけが理由ではなく、私たちがこの一年のあいだに「ステイホーム」という命令を身体化してしまったからかもしれない。

「ステイホーム」という言説の広がりによって、私たちは「ホーム」という言葉を強く意識するようになった。「ホーム」は多義的な言葉であり、使われる文脈によって、母国や故郷、地元、家庭、個人の身体などを指す、階層性や多元性をもった言葉である。また、客観的には「ホーム」と理解できなくても、その人にとって居心地の良い場所を指す言葉でもある。イギリスの社会学者であるレス・バックが、評論家のジョン・バージャーに依拠しながら、「ホーム」とは地理的な意味ではなく、存在論的な意味での世界の中心であると述べたように (Back 2007=2012: 126)、「ホーム」という概念は、既存のコミュニティや場所だけでなく、その人にとっての存在論的な「ホーム」を指すこともある。人の移動を停止し、「ホーム」にとどまることを強制した COVID-19 の流行は、期せずして私たちに次の問いを投げかけた。「あなたにとってのホームはどこか」。

その問いに応えるかのように、筆者も自分にとっての「ホーム」を一年間考えてきた。自ら積極的に考えてきたというより、生活の変化を感じるなかでふとした瞬間に考えさせられてきたというほうが適しているかもしれない。その思考は、起承転結をもって話せるような直線的なものではないのだが、それはまさに「ホーム」が多義的で可変的なものであることにかかわっているように思う。

本稿では COVID-19 を通じて生じた 2 つの出来事から、広く現代社会における「ホーム」の問題と可能性を考えてみたい。2 つの出来事とは、まず自粛期間中に自宅の居心地が徐々に悪くなっていったことである。もう 1 つは筆者の研究対象として、かつて現地調査を行ったカンボジアの日本人向けゲストハウスでみた光景と、そのゲストハウスの COVID-19 による閉業である。本稿では前半部で筆者自身の経験を描き、後半部にゲストハウスの状況を分析することで、上記の目的に応えたい。

2. 「ホーム」とリスク

2. 1 不安定な「ホーム」の問題性

「ステイホーム」が強い影響力をもって叫ばれ、世間に浸透した一方で、この標語がもつ暴力性や危険性については、人文・社会科学で種々の議論がなされている。た

【特集】

たとえば『現代思想』の「感染／パンデミック」（2020年5月）や「コロナと暮らし」（2020年8月）という特集では、多くの論者が「ステイホーム」という一見穏やかな言説に隠された問題を指摘している。

小ヶ谷（2020）は、「ステイホーム」という標語において、「おうち時間」や「おうちで過ごそう」などの穏やかな言葉が使われることにより、移動の自由を禁じる暴力的な命令がマイルドに塗り替えられたことを指摘する。また、そこで前提とされる「ホーム」が、男性優位主義の社会において「女性らしさ」とともに想起されるロマンティックな空間として一元的に考えられている点に注意を向ける。そうした構造のなかで「ホーム」は再生産労働の場であり、ジェンダーや世代、エスニシティが交差した抑圧や暴力の場でもあるにもかかわらず、「ステイホーム」という標語はこうした抑圧を無視して、人々を「ホーム」に押し込めてしまう。

また中森（2020）は「ステイホーム」と家族の問題に焦点をあてる。「ステイホーム」の呼びかけは、「ホーム」＝家族が安定的なことを前提としているが、必ずしも家族が親密で安全な場所であるとはかぎらない。そこでもやはり「ホーム」の複雑さが捨象され、単一の「ホーム」が想定されている。さらに、山家（2020）はそもそも住居＝「ホーム」をもたない人々の存在が「ステイホーム」では見落とされており、加えて COVID-19 の支援策をめぐっても、そうした人々への配慮が（これまでと同様に）不十分であることを指摘した。

「ステイホーム」という標語は一見すると聞こえがいい。日本で感染が広まりはじめた当初、「家にいるだけで世界が救える」という言い方も聞かれた。家から出るのを我慢するだけで、大切な家族や友人、知らない誰かを守ることができる。たしかに、そのこと自体は間違っていない。しかし、「ステイホーム」はさまざまな分断や困難を捨象したうえで成り立っている言葉であることを忘れてはならない。「ホーム」の周縁に位置する人々の存在——外にいざるを得ない人、外で働かなければ生計を立てるのが難しい人、そもそも家が「安全」ではない人々——への想像力が失われたとき、「ステイホーム」は暴力性をもつものとなる。自粛に応じない人を責める「自粛警察」や、感染拡大を「無視」して飲み場に集う人を自分とは違うものとしてなじるまなざしは、その典型的な例かもしれない。

以上のように、「ステイホーム」という、移動を禁じるメッセージは問題含みのものであり、「ホーム」の内外にあるリスクと向き合う他者への想像力は決して失われてはならない。

2. 2 小さな秘密と「ホーム」の変容

他方で、一見すると「ホーム」のなかで「無事に」暮らしているように見える人々にもリスクがあることを見落としではならない。

博士後期課程の大学院生である筆者の一年間を振り返れば、自宅に Wi-Fi とパソコンと本があっただけで、たいていの仕事はこなせてしまった。一人暮らしをしている筆者は、家族との関係という「ホーム」における一つのリスクを引き受けることもなく、Zoom で授業もゼミも飲み会もこなして、大学に行かなくて良い日々を楽しんだ。そもそもインドアな志向をもつ筆者にとって、「外に出る」という外圧がない「ステイホーム」は素直にとっても嬉しかった。スーパーでの買い物や Wi-Fi の利用を当たり前前に享受できる生活インフラと、それを支える人々に感謝しつつ、快適な生活を送っていた。

しかし、2020年の7月頃になると、突然外に出たくて仕方なくなってきた。なぜ友人と会って酒を飲んではいけないのか。なぜ映画を見に行ってもいけないのか。どう

【特集】

やってストレスを発散すればいいのか。感染を恐れなければ遊びに出かけることができるかもしれないが、発症した場合一人で乗り切ることができるのか（無理だろう）。そしてその時期は（今も）仮に遊びに出かけても、そこで感じたことや考えたことを誰かに共有するのも憚られるつらさがあった。遊びに行くと知って、この人は私に幻滅しないだろうか？

オンラインでコミュニケーションを続けていたこの期間、私たちは主に言語的なコミュニケーションしかできなかった。ビデオ通話では相手の身体や細かな表情が分かりづらいため、非言語的なメッセージを読みづらい。普段は言葉以外の部分から否が応でも伝わってくる相手のテンションや体調が分からない。会えば必ずする細かな雑談や近況報告も、オンラインの「ついで」では遮断されてしまう。

そのためこの時期、私は何も悪いことをしていないはずなのに、小さな秘密をたくさん抱え込むことになった。「実は今日はのどが少し痛い」「実は昨日、友人とランチを食べてしまった」「一昨日は用があって仕方なく電車に乗った」…。のどが少し痛ければ不安だ。不安だけでも誰にも言えない。言ったほうが良いことも分かっている。しかし…。この一連の悩みをさんざん繰り返し、ごく近い人にだけ言う。言わないこともある。

そもそも本来ならば何も悪いことをしていないはずが、「新しい生活様式」において、不要不急の外出や遊びは新しい悪事となる。以前とは異なる価値観を自分のなかに内面化し、そこから逸脱しないように自分を管理しなければいけない。それができなければ、まるで小さな子どもが自分のした悪事を隠すかのように、相手に悟られないようにふるまう。しかもオンラインだからますます感じ取られることはなく、罪悪感だけが溜まっていく。こういったコミュニケーションがそのころから今までずっと続いている。これが自粛疲れなのだろうか。

こうして「ホーム」には、やりきれない悩みが滞留しはじめる。外に出たい。自宅に止まることに抵抗感がなかった筆者にとっても、「ホーム」は居心地の悪いものに変化してしまった。

前述した『現代思想』において、文化人類学者の猪瀬浩平と久保明教はコロナ禍の自粛生活と、自宅への意識の変容を次のように述べた（猪瀬・久保 2020）。

…外出する機会が減り、授業や呑み会をオンラインで行うようになって、僕はだんだん「うちがうちでなくなっていく」ように感じるようになったからです（同上、162）。

「おうち」というのは、そこから外に出かけて、そこに帰ってくる場所ですが、出かけることがなければ帰ることもなくなります。出かけることもなく、ただ居続けている「おうち」とはいったいどんな場所なのでしょう（同上、162）。

不快なノイズを浴びることのない「おうち」での生活は不思議と辛いものでした。私たちが、親密ではない他者との関係を大きく誤解しているのだとすれば、それをどうとらえ直せるのか（同上、163）。

親密なものに満ちた「ホーム」は、親密でないものに満ちた「アウェイ」との関係においてかろうじて成り立っているのかもしれませんが（同上、163）。

猪瀬と久保が実際に経験した上記のような「ホーム」の居心地の悪さは、安定した「ホーム」に悠々と居座っていた筆者にも襲ってきた感情であった。家の外で、不要不急のことをしたくてたまらない欲望と、それを素直にすることができない怒りがじわじわと湧いてきた。これは「ホーム」の安定性にかかわらず、誰にでも生じる変化

【特集】

であり、断片的に生じる「生きづらさ」である。仮に「ホーム」が安定していたとしても、私たちの精神や身体は静かに蝕まれてしまう。これは「ホーム」の周縁ではなく、その真っ只中で生じるリスクであり、「ステイホーム」の言葉をいくら信じてみたとて解決する問題ではない。COVID-19 の震源地となってしまった中国湖北省の武漢市に住む小説家の方方は、武漢市封鎖中の出来事について書いた日記（2月12日）のなかで次のように述べた。

武漢では、ほとんどの人が心に傷を負っている。おそらく、これは無視できない事実だ。二〇日以上家に閉じこもっていてもなお健康な人たち（子供を含む）であれ、冷たい雨の中を街じゅう駆けずり回っていた感染者たちであれ、みんな心に傷を負った。（中略）発散、号泣、悲嘆、慰めが人間には必要だ。武漢市民の苦しみ、それはスローガンを叫んで和らぐものではない（方 2020: 79）¹。

3. 「ホーム」と外部

3. 1 「ホーム」と「アウェイ」の往還

2 章では筆者が自分にとっての「ホーム」を考えるきっかけになった出来事のひとつを整理した。「ステイホーム」という標語の暴力性は、単一の「ホーム」イメージからこぼれ落ちる人に対してだけでなく、「ホーム」のなかに止まることができていたはずの人の心身にも影響を及ぼす。

猪瀬らは、「ホーム」が変容していくメカニズムを「アウェイ」との往還の有無から指摘した。親密なものしかない「ホーム」の居心地の良さは、実はノイズや親密でないものが存在する「アウェイ」によって作りだされる関係的なものであった。国家、故郷、家庭、自分の居場所、いずれの「ホーム」にしても「外部」との関係において枠が浮上し画定されることは、あらゆる現象に通ずるメカニズムである。

久保はほかの論考で、前述の議論の土台となる考えを「帰る場所」の問題として次のように書いている。

私たちは単に特定の場所に「帰る」だけではありません。そこで体を休め、食事をとり、眠ります。動物としての能動性をキャンセルして受動的に我が身をまかせます。そうした受け身になれる場所、安全が確保され、意識を失って、睡眠をむさぼっても大丈夫なところ、それが「帰る場所」だ、ということになるでしょうか。（中略）いや、それだと牢獄も収容所も同じですね。受け身です。安全です。眠れます。でも帰る場所とは言えないように思います。そこにずっといるからです。そこにずっといるしかないからです。では、そこからどこかに行けるところ、そこからどこかに行きたくなるところ、どこかに行くことを可能にしてくれるところが「帰る場所」だ、と言うのはどうでしょうか？（久保 2016、下線筆者）

久保が述べるように、「ホーム」や「帰る場所」は、それとは異なる場所との関係があって初めて立ちあがるものであり、私たちは日々の生活のなかで「ホーム」と「アウェイ」を往還することによって自身の心身を安定させていたといえよう。自粛期間中に「おうち時間」などの言葉でいつもとは違う家の過ごし方が流行ったのも、星野リゾート（2020）が「マイクロツーリズム」を提唱して自宅から 1～2 時間で行ける場所の観光を推奨し、地域内の余暇が注目されたのも（Google の広告「近場で何しよう？」）、人々が新しい「アウェイ」を作りだそうとした結果だと考えられる。生活を正常化するため、私たちはときにこれまで「ホーム」として考えてきた場所のなかに、「ホーム」と「アウェイ」の往還を創出していった²。

3. 2 「ホーム」と「アウェイ」の往還と観光

ここまでくると、観光という現象が社会および日常生活の正常化作用として「アウ

エイ」の役割を担ってきたことに触れないわけにはいかない³。観光社会学者のジョン・アーリは『観光のまなざし』（初版 1991 年）において、それまでの社会学が労働や家庭などを主な議論の対象としてきたのに対して、観光という余暇の問題から社会を問うことの重要性を逸脱論の観点から指摘した。また、アーリは既存の理論的研究を整理し、観光という現象は真正性の探求の有無によって編成されるのではなく、日常との差異においてのみ存在することを述べた。アーリによれば、観光は日常という「ホーム」に対する外として⁴、常に関係論的に現れるものであり、だからこそ観光を論じることによって日常社会のメカニズムも明らかになる（Urry and Larsen 2011=2014）。

COVID-19 は国家間の人の移動を止め、さらに国内でも人の移動を止めた。日本は 2020 年の 3 月下旬から徐々に国境の行き来を封鎖し、4 月 7 日に緊急事態宣言を発令したことで、県境をまたいだ移動も自粛ムードとなった。車のナンバーから移動の範囲を特定し批判が起きたのもこの時期である。その後、5 月 25 日に全国で緊急事態宣言が解除され、6 月 19 日には県をまたぐ移動も可能になったが、国外へ出る場合には高額な航空券代が必要になったり、現地でも入国のために高額のデポジットが求められたり、14 日間の隔離期間が必要となったりするなど、とくに国境を越えた移動には厳しい条件が課せられたままとなっている。また、2021 年 1 月初旬に、国内の一部地域に 2 度目の緊急事態宣言が発令され、新たに変異種の拡大が続くいま、観光へ行くという「ホーム」と「アウェイ」の往還は再び制限されざるをえない状況となっている。

他方、2020 年度の下半期に行われ、積極的に推進された「Go To キャンペーン」は、抑え込まれた欲求を満たすものだった。通常の料金より低価格で観光や食事に行くことができるこの政策によって、多くの人々が自粛疲れを解消するように観光に出かけた。この客足の増大は割引による低料金だけが理由ではないように思われる。まさしく、自粛期間中に充たされることのなかった「ホーム」と「アウェイ」の往還を回復する試みだったといえよう。

4. ゲストハウスという「ホーム」

4. 1 ゲストハウスの閉業

しかし、観光は単なる「アウェイ」だろうか。私たちの生活には「ホーム」と「アウェイ」の往還が必要不可欠であるが、だからといってそれをそのまま日常＝「ホーム」、観光＝「アウェイ」として結びつけることは早計である。ここでようやく筆者に「ホーム」を意識させたもうひとつの出来事である、ゲストハウスの調査について述べたい。

2021 年 1 月 5 日、2019 年の秋から 2020 年の初めに短期スタッフとして滞在しながら現地調査をしていたカンボジア、シェムリアップにある A ゲストハウスが一時閉業した⁵。研究の対象であった店舗が無くなるという出来事は、私にとって独特の喪失感をもたらす出来事だった。しかしそれ以上に、Twitter や Instagram などの SNS を通じてゲストハウスのアカウントに寄せられた集合的な記憶や思い出が印象深かった。それらは、多くの旅人にとってそこが「ホーム」であったことを示すものだったように思うからだ。

私の人生の中で間違いなく大きな転機となった A ゲストハウス。

2 度も受け入れてくれて、器もお腹も大きな B さん（オーナー）にはた一いへんお世話になりました。

【特集】

シムリの帰れる場所が無くなってしまふのはとっても寂しい。けどまたきつとどこかで会える気がする。#A ゲストハウスの思い出

これは A ゲストハウスが閉業を発表した当日に **Twitter** に投稿された文章である。この日、A ゲストハウスのオーナー（40 代前半・男性）⁶ が、「#A ゲストハウスの思い出」というハッシュタグをつけて、この場所での思い出を発信してほしいと投稿し、多くの宿泊者がそれに応え写真付きで自らの思い出を語った。この投稿者によれば、A ゲストハウスは「帰ることができる場所」だった。またほかの宿泊者は、A ゲストハウスがなくなり「ホームレス」になったとオーナーに伝えたという。

前半の議論を踏まえれば、帰ることができる場所とはそれが海外であったとしても、存在論的な「ホーム」になりうる。現地調査ではこのようにゲストハウスが観光者にとっての「ホーム」として映し出される場面が何度もあったように思われる。観光先に「ホーム」が立ち現れるような状況は、日常＝「ホーム」、観光＝「アウェイ」として考えるような一元的な見方からは語りつくすことができない。

以下では、2019 年 10 月から 2020 年 3 月まで A ゲストハウスで行った調査のデータを踏まえ、ゲストハウスにみられる「アウェイ」や「ホーム」の感覚を読み解いていく。この作業を通じて、今日の観光が「アウェイ」に一元化できない様相がみえてくる。そして観光のこうした変化は、その裏返しとして私たちの日常生活における「ホーム」や「アウェイ」の問題を照らし出すだろう。

4. 2 ゲストハウスの概要

筆者は 2018 年から国内や東南アジアのゲストハウスにおいて観光者の交流に関する現地調査を行ってきた。ゲストハウスは、ゲストハウスやバックパッカーズ、ホステル、ドミトリイ等と称する素泊まりを基本とした比較的低廉な宿泊施設（石川・山村 2014）として括られるが、明確な定義は難しい。共有スペースやドミトリイなどの特徴的な設備や、トイレ・シャワーなどの水回り空間を共有することなどの機能的な特徴がゲストハウスをホテルや旅館と区別するものである。

とりわけ筆者が調査を行ってきた東南アジアの日本人向けゲストハウスにおいては、旅行にかかる料金を安く済ませたい人や新しい出会いを得たい人、現地の情報をより多く得たい人など、様々な観光者が集まって来る。1 人、もしくは 2 人で訪れる観光者らは、その場で出会った人たちと一緒に観光や食事に行き、共有スペースにおいて深夜まで酒を飲んで語り明かすという特徴的な行動をとる。しかし、その交流は一時的な関係にすぎず、数日間の熱狂とは裏腹に、ゲストハウスを去ったあとは二度と再会しないことも多い。人々は観光を舞台に一期一会の関係やコミュニケーションを楽しんでいる（鍋倉 2020）。

4. 3 ゲストハウスの「ホーム」と「アウェイ」

4. 3. 1 必ず去る場所

まず、観光者にとってゲストハウスが「アウェイ」として認識される状況について触れよう。海外の日本人向けゲストハウスを訪れる人は圧倒的に「観光者」が多く、家を出て家に帰っていくルートを通る人々である。ゲストハウスは観光者にとっての一時的な止まり木でしかない。

ゲストハウスのコミュニケーションにおいて特徴的な場面の一つに「見送り」がある。ゲストハウスを去る観光者を、ほかの宿泊者とスタッフが見送る別れの儀式はゲストハウスの毎日のルーティーンになっている。前日の会話で該当の宿泊者がゲスト

【特集】

ハウスを発つ時間が共有されると、翌日のその時間には早朝でも深夜でも宿泊者たちがぞろぞろと集まってくるのである。

宿の入り口に人々が集まり、去る観光者に対して「またね」「お気をつけて」「バイバイ！」「ありがとうー！」「いってらっしゃーい！」などの言葉を投げかける。去るほうも「ありがとうございました！」「お世話になりました」などの言葉を返し、お互いが見えなくなるまで手を振りあって別れの儀式をすます。そして数日経てばすべての宿泊者が立場を逆にし、自分が宿を去っていく。

宿泊者は宿を去る前、「寂しい」「仕事嫌だな」「また来ます」などの言葉を繰り返す。「見送り」という別れの儀式は、旅先にずっといることはできないという現実を彼らに突きつける。「来て帰る」という行程がある以上、ゲストハウスは短期的に滞在するしかない非日常的な「アウェイ」なのである。

4. 3. 2 擬制的なホーム

しかし、大局的にみれば「アウェイ」であるとしても、より細かな場面に注目すればゲストハウスは「ホーム」にもなりうる。旅先という「アウェイ」な状況に置かれたなかで、ゲストハウスはいかに「ホーム」に変容しうるのか。

一つの場面として「擬制家族的」な関係（尾添 2019）をあげよう。尾添は子ども食堂で交わされるコミュニケーションの一側面を、擬制家族的な状況として分析した。食事をとるという行為が中心にある子ども食堂では、食事の場面で家族の関係が想起される。そこでスタッフは子どもたちを見守る「親」のような存在と、子どもと一緒に過ごす「兄弟」のような立場をとって子どもたちとかかわる。また、子ども食堂はメンバーが固定していないことが特徴であるが、その都度のコミュニケーションのなかで不定形に擬制家族的な状況が現れることがある。

東南アジアの日本人向けゲストハウスは、大学生の長期休暇である 2～3 月と 8～9 月が繁忙期であるが、その学生シーズンには、宿泊者である 20 代前半の学生と 40 代後半の女性スタッフのあいだで、日常生活の「母子」間にみられるコミュニケーションがなぞらえられる場面が目立つ。

たとえば、宿泊者が女性スタッフを「お母さん」や「アンマー」⁷と呼ぶ姿が頻繁にみられる。また、A ゲストハウスでは世界遺産であるアンコール・ワットにて朝日を見るツアーが一番人気であるが、早朝 4:30 に出発するための「早起き」をめぐり、朝起きてこない子どもを母親が急かすような会話がみられる。また、女性スタッフが衣類の洗濯サービスを担当していることから、日常生活における「母親」の家事労働やそこから派生した子どもとのコミュニケーションの形が反復されている様子がみてとれる。さらに、ゲストハウスを出入りする際の声かけが常に「いってらっしゃい／いってきます」「おかえりなさい／ただいま」であることから、ゲストハウスに「ホーム」性が投影されている様子が明らかになるだろう。

ゲストハウスがまさに「ハウス」であるように、ここでは日本における日常生活上の家族的な関係性が繰り返されている。スタッフや宿泊者は一時的に家族に変身することによって、親密性を作りだしていくのである⁸。

さらにもう一つ、ゲストハウスが身をゆだねる場所として出現する場面がある。ゲストハウスには 1 人、もしくは 2 人で訪れる観光者が多いことにはすでに触れた。初めて訪れる地において、旅行会社などに頼らず自ら航空券や宿泊施設を予約し、現地の交通手段を用いて移動・観光するには多大なエネルギーを要する。旅先で一から計画を立てたり、張り切って観光をしたりして疲れる経験は誰にでもあるだろう。日本人向けゲストハウスには、ときに「観光疲れ」の観光者も訪れる。

【特集】

事例①

筆者がA ゲストハウスのチェックインを行うカウンターで、宿泊者のタツヤ（30 代後半・男性・仮名）とツアー相乗りなどについて話していたところ、客室のほうからミサキ（20 代後半・女性・仮名）がやってきた。ミサキは「これまで日本人ゲストハウスを避けていた」と話すタツヤに対して共感を示し、「私も」と言った。他方でそのあとにすぐ、「でも自分で計画たてるのに疲れちゃって、もう出歩きたくないくらいまでなっちゃって…。ここで色々教えてもらってツアーもあるからよかった」と話した（2019 年 12 月 10 日）。

事例にあるように、日本人のみが集まる日本人向けゲストハウスを避ける観光者も多い。しかし、そうした志向をもつ観光者にとっても、ゲストハウスはときに身をゆだね、受け身になることができる場所となる。ミサキは転職のあいまに 40 日間東南アジアを旅行していた。A ゲストハウスでの滞在を見ていても、積極的に出歩いていることが印象的だった。それも「王道」の観光に行くのではなく、料理教室に行ったり、現地で知り合った相手と遊んだりし、旅先で日常を過ごすかのように「上手に」遊んでいた。しかし後半に差し掛かったカンボジアでは、そうした旅のスタイルを続け、「頑張って」動いてきたことに疲れてしまったと述べた。

旅先という「アウェイ」な状況における気疲れに対し、日本人が集まるゲストハウスはまず言語のプレッシャーから解放してくれる。そして、自ら能動的に調べなくても、おすすめの場所やツアーの提案をしてくれる。旅先という「アウェイ」において、人々が緊張を解き受動態になれる場所は、一種の「ホーム」である。

4. 3. 3 第二のホーム

一方、旅先いかにかわらず、ゲストハウスが「ホーム」とみなされることがある。そもそも A ゲストハウスの Twitter のホーム画面には、「シェアリアップで旅人が集まる宿 海外に第 2 の故郷作りませんか？」と書いてあるのだが、ゲストハウスの常連と呼ばれる人々の語りからは、まさにゲストハウスを自らの居場所とみなし、「第二のホーム」としている様子がうかがえる。

事例②

11 月中旬、当時短期スタッフをしていたアイ（20 代後半・女性・仮名）に会うため、チヒロ（20 代後半・女性・仮名）は A ゲストハウスに 3 泊した。チヒロは 2 年前に海外旅行を初めてして、海外旅行に「目覚め」、今では月に一度は海外旅行をしている旅行好きである。今回のチヒロの目的は、アイに会うことと、A ゲストハウスでダラダラすることだった。3 泊のあいだ、彼女がゲストハウスの「国境」から出たのは、近所の人が子犬を見せに来たときと、日本人が営んでいる和食レストランに昼食で行ったときだけであり（自身もそれを嬉しそうに話す）、食事も A ゲストハウスに備え付けられたレストランで焼きそばを食べ続けていた。チヒロは A ゲストハウスを「実家です」と語るが、A ゲストハウスを訪れたのは、6 か月前の 2019 年の 5 月に初めて来て以来 3 回目である（2019 年 11 月 17 日）。

事例③

2018 年に初めて A を訪れたダイスケ（30 代後半・男性・仮名）は、年に 2 回ほどやってくる常連である。「俺、友達がないから」と話すダイスケは「現実逃避」のために旅行に出かける。東京出身・在住で、収入のある仕事をしているが、日常生活では人間関係の面でやりきれなさを感じている。共有スペースで女性スタッフと筆者とダイスケがこうした日常生活の悩みについて話すなか、ダイスケは「俺はオーナーがうらやましい。東南アジアで事業できて。しかもここなら自分のこと好きな人が、ここにいるだけで会いに来てくれるし。本当にうらやましい」と憧れを述べた（2020 年 2 月 23 日）。

【特集】

事例②において、チヒロは A ゲストハウスに長年通っているわけではないが、その場所を気に入、「実家」のように居心地が良いと述べる。またダイスケも、日常生活に悩みを抱えるなかで A ゲストハウスを自分の居場所と感じている。

前項では旅先という「アウェイ」な状況のなかで関係論的に立ちあがる「ホーム」らしさを指摘した。しかし、チヒロやダイスケの認識は A ゲストハウスが海外にあるという点には関係がない。日本から何時間も離れた場所で、頻繁に訪れることができる「ホーム」として認識されている。オーナーは A ゲストハウスを「常連の飲み屋だと思っている」と述べた（2020 年 1 月 27 日）。A ゲストハウスを欲する常連たちは、自分の日常生活における「ホーム」よりも「ホーム」らしいところとして、A ゲストハウスを認識している。これはバックのいう「家から離れたホーム」といえるだろう（Back 2007=2014: 97）。

4. 3. 4 関係のなかの居心地

さらに、人々が流動的に行き交い、人間関係の布置が不安定であるゲストハウスにおいては、同一人物にとっての「ホーム」の感覚も不安定で一時的なものにならざるを得ない。

事例④

筆者と 2 名の宿泊者が深夜に A の共有スペースで、ゲストハウスの魅力について話をしていた。そのうちの 1 人であるショウタ（30 代前半・男性・仮名）が、タイのバンコクにある日本人向けゲストハウスに滞在した思い出を話した。ショウタは 2019 年 6 月に日本人向けゲストハウスに滞在した。閑散期であったその時期には、年下の男性の宿泊者が多く、彼らと過ごした生活がとても楽しかったという。そのときは居心地がよく、1 か月ほど同じゲストハウスにとどまり、共有スペースでずっと寝そべっていた。しかし、同じゲストハウスを再訪したときには、前回とはメンバーや雰囲気異なっていたために、「あんまり慣れなくて微妙だった」。ショウタは人間関係や雰囲気づくりを「またやり直さなきゃいけないのか」と思ったという（2020 年 1 月 26 日）。

この事例にみられるように、仮に同じゲストハウスに滞在したとしても、そこに集う人の特性や組み合わせによって、ゲストハウスの居心地は多様に変化する。A ゲストハウスにおいてある宿泊者は「本当に日とか人によって雰囲気ちがいますよね。昨日はぶっちゃけ無理でした」（2020 年 2 月 1 日）と述べた。ゲストハウスにおいて、そこを「ホーム」と感じるか「アウェイ」と感じるかは微細な関係の布置によって 1 人の人間のなかでも変化してしまうのである。

4. 4 「ホーム」と「アウェイ」の万華鏡

本章では A ゲストハウスを事例に、ゲストハウスに付与される「ホーム」と「アウェイ」の認識をみてきた。大きな文脈でみれば、旅先であるゲストハウスは、やはり「アウェイ」である。しかし、種々の関係の布置において、ゲストハウスは一時的かつ不定形な「ホーム」に姿を変えたり、安定的な居場所になったりする。

さらに、「ホーム」や「アウェイ」の認識は、長期のあいだ継続する安定的なものであることもあれば、その場で瞬時に切り替わっていくものでもあった。少しでも関係の構造が変われば、万華鏡のなかの図が変わるように居心地の良さも変化する。ゲストハウスはいったい誰にとっての「ホーム」で、誰にとっての「アウェイ」なのか？ここでみられる両極の融解や絶え間ない転回は、客観的にも主観的にも容易に判断できるものではないだろう。

【特集】

3 章までに述べてきたように、COVID-19 の流行によって、私たちは「ホーム」について考えることを促され、「アウェイ」への欲望を募らせてきた。しかし、そのとき「ホーム」と同様に「アウェイ」も一元化して考えられてはいないだろうか。

前述したように、逸脱論としての観光研究が行われるとき、観光は日常生活を映し出す鏡だった。研究者は非日常を分析することにより、日常を明らかにしようとしてきた。しかしゲストハウスの事例から明らかなように、今日の観光において日常＝「ホーム」、観光＝「アウェイ」の二項対立はすでに成立しない。本稿の冒頭で「ホーム」の多義性を指摘したように、客観的に「アウェイ」としてみなされる観光のなかには、当事者にとっての存在論的な「ホーム」がみられる。また、本稿では描き出せなかったが、ゲストハウスが「アウェイ」であるからこそ居心地が良いと感じる瞬間もあるだろう。

もちろん、アーリや須藤廣などの社会学者は近年の論考のなかで、これまで観光の場面に目立った消費の論理やものの見方、移動性が日常生活との差を無くしつつあり、観光が「終焉」に向かっていることを指摘している（須藤 2008; Urry and Larsen 2011=2014）。日常生活と観光との境界が融解することによって、消費の仕方だけでなく居心地の良さをめぐる問題性も変化しているといえよう。

5. 交錯する「ホーム」と「アウェイ」とその可能性

観光が必ずしも「アウェイ」ではないとき、日常もまた必ずしも「ホーム」ではない。本稿の前半では、COVID-19 の流行とともに注目されるようになった日常生活における「ホーム」のゆらぎを指摘し、「ホーム」と「アウェイ」の往還が私たちの日常生活を正常化させていることを論じた。「Go To キャンペーン」などにみられる観光への欲望の高まりは、「アウェイ」を得る手段としての観光を想起させる。しかし、後半に論じたゲストハウスの例からは、観光が必ずしも「アウェイ」ではないことが示唆された。今日、「ホーム」と「アウェイ」の問題はより個人化したものとして考えなければならない。そして個人化しているがゆえに、私たちの存在論的な「ホーム」と「アウェイ」は、安定したものとしては獲得しづらくなっている。

移動から「ホーム」の問題性を考えた小ヶ谷は、『ホームにあること』と『移動すること』を二項対立で考える思考に陥らずに、「さまざまなスケールで『移動』する自由と、多様な関係性の中で『ホーム』を（複数）持つ／持たない自由」を手放さないようにすることが必要であると述べた（小ヶ谷 2020: 94）。

「ホーム」と「アウェイ」のゆらぎを積極的に考えるならば、両者の境界を画定しづらい今日だからこそ、私たちは「ステイホーム」のように一元的に語られる「ホーム」のイメージにしばられることなく、自分にとっての「ホーム」と「アウェイ」、そして両者の往還を作りだすことができるかもしれない。COVID-19 の流行は、私たちの「ホーム」をめぐる危機と可能性を浮かび上がらせている。

【参考文献】

- Back, Les, 2007, *The Art of Listening*, London: Berg. (=2014, 有元健訳, 『耳を傾ける技術』, せりか書房.)
- 方方著・飯塚容・渡辺新一訳, 2020, 『武漢日記——封鎖下六〇日の魂の記録』河出書房新社.
- 猪瀬浩平・久保明教の往復書簡「忘却することの痕跡——コロナ時代を記述する人類学」『現代思想 コロナと暮らし——対策の現場から』152-171.
- 石川美澄・山村高淑, 2014, 「国内における宿泊施設型ゲストハウスの経営と利用の実態に関する研究」『都市計画論文集』49(2): 140-145.

【特集】

- 鍋倉咲希, 2020, 「日本人ゲストハウスにおけるコミュニケーションの装置と特徴——囲う目的化するコミュニケーションの分析に向けて」『旅の文化研究所 研究報告』30: 41-58.
- 中森弘樹, 2020, 「『密』への要求に抗して」『現代思想 コロナと暮らし——対策の現場から』65-72.
- 小ヶ谷千穂, 2020, 「移動から考える『ホーム』——画一的な『ステイホーム』言説を乗り越えるために」『現代思想 コロナと暮らし——対策の現場から』89-95.
- 尾添侑太, 2019, 「居場所概念の再検討——子ども食堂における参与観察を通して」『ソシオロジ』64(2): 39-56.
- 須藤廣, 2008, 『観光化する社会——観光社会学の理論と応用』明石書店.
- Turner, Victor, 1974, *Dramas, Fields, and Metaphors: Symbolic Action in Human Society*, Ithaca: Cornell University Press. (=1981, 梶原景昭訳, 『象徴と社会』紀伊國屋書店.)
- Urry, John and Jonas Larsen, 2011, *The Tourist Gaze 3.0*, London: Sage. (=2014, 加太宏邦訳, 『観光のまなざし 増補改訂版』法政大学出版局.)
- 山家悠平, 2020, 「たったひとりにさせない／ならないために——危機の時代の分断をこえて」『現代思想 感染／パンデミック——新型コロナウイルスから考える』247-254.
- 【参照 HP】
- 星野リゾート, 2021, 「星野リゾートの『マイクロツーリズム』ご近所旅行のススメ」
<https://www.hoshinoresorts.com/sp/microtourism/>, 2021年1月31日取得.
- 久保明教, 2016, 「暁の人類学(8)」<https://apartment-home.net/long-visiter/kubo08/>, 2020年8月21日取得.

【脚注】

- 1 方方のは世界 15 国で翻訳され出版に至っている。日本において最もよく言及されている一説日記は、2月24日の日記のタイトルにもなっている次のものだ。「ある国の文明度を測る唯一の基準は、弱者に対して国がどういう態度を取るかだ」(方 2020: 141)。
- 2 「おうち時間」と「ホーム」と「アウェイ」の往還との関係については、立教大学観光学部の「卒業論文演習」において筆者がティーチング・アシスタントとして学部生と行った議論にもとづく。岩井友海, 2021, 『with コロナ時代の観光——人々は歩かなくなるのか』立教大学観光学部 2020 年度卒業論文。
- 3 2020 年 7 月 5 日に立命館大学人文科学研究所が主催した『新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 以後の観光研究』のシンポジウムでも、橋本和也が「『一般生活者・観光者』の生活の立場からという題目でコメントし、日常生活＝ウチと観光＝ソトとの往還について問題提起した。
- 4 ヴィクター・ターナー (1974=1981) が文化人類学とパフォーマンス理論に依拠して提示した「コミュニティ」という概念も、観光にみられる日常から非日常への移動とその往還性を端的に示した概念として重要である。
- 5 A ゲストハウスに限らず、これまで調査のために訪れたいくつかの国内外のゲストハウスが閉業や休業に至った。営業を続けているところはゲストハウス業界にとって一つの希望に見えるが、経営が苦しいことに変わりはない。また、COVID-19 の流行が下火になったとしても、見知らぬ他人と同室で過ごすドミトリのような宿泊形態がどれほど受け入れられるかは判断しがたい。COVID-19 は移動の自由の制限に加えて、他者との接触方法をも変化させている。
- 6 A ゲストハウスのオーナーは 40 代男性の 2 名である。本稿では B と C と表記する。B はシェムリアップに常駐しており、C は別の国に滞在しながら宿の経営をサポートしている。A ゲストハウスの Twitter アカウントは B と C が共同で運営している。
- 7 「アンマー」とは沖縄の方言で母を意味する。この言葉を使っていた宿泊者は、A ゲストハウスでよく「かりゆし 58」の楽曲（「アンマー」「オワりはじまり」など）を流しており、この曲名から連想したと考えられる。
- 8 「母子」の関係をなぞるような擬制家族的な状況は A ゲストハウスに特殊な状況と言えるかもしれない。オーナーと宿泊者の年齢差やオーナーの個人的な性格によっては宿泊者との関わり方も変化することは注意が必要である。